はじめに　なぜいま『笑っていいとも！』なのか？　１９８２年のテレビジョン

１年ほど前、私のようなかつての「テレビっ子」にとって時代の節目を実感させる出来事があった。レモンを持って微笑（ほほえ）む芸能人の表紙写真でお馴染（なじ）みの週刊テレビ情報誌「ザテレビジョン」が２０２３年３月をもって休刊になるというニュースである（ウェブ版は存続）。

いまやテレビ番組表は少し先のものでもインターネットなどで簡単に見ることができる。その意味で、とりたてて不都合はない。だが、毎週発売日にテレビ情報誌を買ってワクワクしながら見たい番組に赤ペンで印をつけていた時代を知る身にとっては、やはり一抹の寂しさがある。

この「ザテレビジョン」が創刊されたのは、１９８２年９月。週刊テレビ情報誌としてはすでに老舗（しにせ）の「週刊ＴＶガイド」（１９６２年創刊）も存在したが、「ザテレビジョン」は

グラビアの充実など10代や20代を中心とした若者向けの誌面づくりを打ち出し、部数的にも「週刊ＴＶガイド」と肩を並べる存在になっていく。この成功に倣うかのように、１９８０年代には多くのテレビ情報誌が創刊された。その事実は、１９８０年代前半のテレビが若者のメディアであったことを物語る。テレビは、時代の最先端を行くメディアだったのだ。

こうした時代のなか、「ザテレビジョン」の創刊から間もない１９８２年10月、お昼にフジテレビの新番組が始まった。タモリがＭＣを務める『森田一義アワー　笑っていいとも！』（フジテレビ系。以下、『いいとも！』と表記）である。本書は、この番組について多面的に深掘りすることを通じて、テレビ、そして戦後日本社会をとらえ直そうとするものだ。

『いいとも！』はテレビの可能性を具現していた

そう思い立ったきっかけは、現在テレビが置かれている〝苦境〟にある。

テレビの影響力には、まだまだ大きなものがある。Ｘ（旧Twitter）などＳＮＳの盛り上がりも、ドラマや音楽番組、アニメなどテレビ番組をリアルタイムで見てのものであるこ

とが珍しくない。だが世帯視聴率の数字を見れば、テレビを見るひとたちの数が減少傾向にあるのは否めない事実だろう。

たとえば、ＨＵＴ（総世帯視聴率。調査対象の世帯のうち、リアルタイムで見ている世帯の割合）の推移を見ると、ゴールデンタイム（午後7時から10時）のＨＵＴは、１９９７年度には70％前後あったものが、傾向として下がり続け、２０２１年度には50％台後半になっている。[*1]

「若者のテレビ離れ」という話もよく聞こえてくるようになった。インターネットやスマホの普及によって、YouTube や TikTok といった動画サイトを見る若者が増え、その分テレビ視聴に割かれる時間が減っているとされる。２０１９年の統計だが、10代では２０１５年に比べてテレビの利用時間が約30％下がったのに対し、ネットの利用時間は約50％上昇している。[*2]

ただし、だから「テレビはもうオワコン」などと言いたいわけではない。テレビならではの可能性があり、それは未来のメディア状況にとってもきっと必要なものだ。そして『いいとも！』という番組は、まさにその可能性を示すお手本のような番組だった。その

ことが言いたいのである。

それは、より大きな歴史の問題でもある。テレビと戦後日本は切っても切り離すことができない。そのことは、高度経済成長とともに爆発的に普及したテレビの歴史を振り返っても明らかだ。そして『いいとも！』という番組は、戦後日本、とりわけ戦後民主主義が持つ可能性を最も具現した番組なのではないか、というのが本書全体を貫く仮説である。その点を以下では、「広場性」「余白」、さらにタモリの「仕切らない司会」といったいくつかの切り口を手がかりに考えていく。

そういうわけで、ある意味本書には二面性がある。過去を振り返りつつ、未来を志向するという二面性である。だから、できることなら『いいとも！』の始まった頃を知る世代のひとにも、その頃をよく知らない「テレビよりはネット」という世代のひとにも読んでもらえればと願っている。

だが１９８２年と言えば、いまからもう四十数年も前。40年と言えば、ひと時代以上も昔の話だ。断片的には覚えていても、当時のテレビのことなど忘れてしまっているというひとも少なくないだろう。むろん、まだ生まれていなかったというひとにとってはまった

く未知の世界に違いない。そこでまず、『いいとも！』が生まれた「１９８２年のテレビジョン」がどのような様子だったか、本論に入る前に記憶を呼び覚ましてみたい。

テレビは日常的娯楽の中心だった

その頃テレビは、まだまだ日常的娯楽の中心として健在だった。たとえば、『ＮＨＫ紅白歌合戦』の視聴率などはわかりやすい。

１９８２年の『紅白』の世帯視聴率は69・９％（ビデオリサーチ調べ。関東地区。以下も同様。また以降、単に「視聴率」と記すときは世帯視聴率を意味する）。近年が30％台であることを考えれば驚異的な数字である。だがこのときは、70％を切ったことで「紅白大丈夫か!?」と騒がれた。それほど『紅白』は「国民的番組」だった。

ＮＨＫは、翌１９８３年の『紅白』に向けて視聴率回復を図る。そのひとつの策が、総合司会へのタモリの起用だった。総合司会はＮＨＫアナウンサーが務めるのが長きにわたる慣例であり、まさに異例の抜擢（ばってき）だった。その一因として、すでに始まっていた『いいとも！』の人気があったことはいうまでもない。本番当日、番組冒頭でタモリが「そろそろ

始めてもいいかなー?」と客席に呼びかけ、観客が「いいともー!」と応答する場面も話題になった。この年の視聴率は74・2%へと回復した。

『輝く!日本レコード大賞』(TBSテレビ系)にもふれておこう。当時は大晦日(おおみそか)夜7時から2時間の放送。『紅白』も2部制が敷かれる以前で午後9時からの開始だったので、2つの番組を連続して見ることができた。どちらも生放送なので、両方に出演する歌手が会場間を慌ただしく移動する様子が年末の風物詩でもあった。

1982年の『輝く!日本レコード大賞』の視聴率は31・3%。近年は10%前後なので、やはり相当高い。この年の大賞は細川たかしが歌った「北酒場」。この頃は、八代(やしろ)亜紀や五木ひろしも大賞を獲得するなど、演歌がまだ流行歌の中心にあった。

ただ一方で、新しい波も生まれていた。1982年の最優秀新人賞は、ジャニーズ事務所(現・SMILE-UP.)のシブがき隊「100%…SOかもね!」。1980年代に入りジャニーズは、田原俊彦、近藤真彦、そして野村義男(THE GOOD-BYE)の「たのきんトリオ」も最優秀新人賞を獲得し、勢いに乗り始めていた。女性アイドルも、この年「赤いスイートピー」を大ヒットさせるなど全盛期を迎えた松田聖子に続き、中森明菜や小泉今日

子といった1982年デビューの「花の82年組」が登場する。アイドル歌手全盛時代の到来である。

「真面目」からの脱却――報道、教育番組の変貌

アイドル歌手は、「歌手＝歌が上手い」という常識を破壊する存在でもあった。彼や彼女たちは、たとえ歌が上手くなくとも、容姿や人間的魅力といった付加価値の部分でファンを惹きつけた。従来の常識にとらわれない遊び心が重視され、日本人の美徳であったはずの「真面目」は敬遠されるようになり始めたのだ。

そうした「真面目」からの脱却は、テレビ全体をも変えた。

日本テレビ（当時）の徳光和夫が総合司会を務めていた朝の帯番組『ズームイン!!朝！』（日本テレビ系、1979年放送開始）では、こんなことがあった。

徳光和夫は、1982年に番組内である約束をした。熱烈な巨人ファンである徳光は、この年の開幕前、「巨人が優勝できなかったら丸坊主になる」と宣言。そして結局巨人が優勝できなかったため、『ズームイン!!朝！』の生放送中に髪を刈り坊主頭になった。こ

の番組は真面目なニュースも伝える情報番組で、バラエティ番組ではない。だがこの「丸坊主事件」が物語るように、遊びの要素を打ち出すことも厭わなかった。

また、ＴＢＳの局アナからフリーに転身した久米宏が１９８２年10月、つまり『いいとも！』とほぼ同時にスタートさせたのが『久米宏のＴＶスクランブル』（日本テレビ系）である。

こちらも情報番組で社会問題や時事問題を扱い、日本テレビの解説委員も出演していた。だが一方でコメンテーターに漫才師の横山やすしを起用。破天荒で知られる横山は物議を醸す持論を展開するだけでなく、生放送中に酔っ払っていることも常だった。それは、後年久米がメインキャスターとなる『ニュースステーション』（テレビ朝日系、１９８５年放送開始）にも通じるような、ショーアップされたニュース番組の先駆けであった。

遊び志向は、お堅いテレビの代名詞だったＮＨＫ教育テレビ（現・ＮＨＫ　Ｅテレ）にも及んだ。

１９８２年には、若者向け番組『ＹＯＵ』が始まっている。それまでＮＨＫ教育テレビの若者番組と言えば、『若い広場』（１９６２年放送開始）のように真面目を絵に描いたよう

なものだった。ところが『ＹＯＵ』では、司会者には売れっ子コピーライターの糸井重里を迎え、オープニング曲とエンディング曲を坂本龍一が担当するなど、ポップな雰囲気の番組に大胆にイメージチェンジした。ゲストにも毎回芸能人や有名人が出演。タモリもそのひとりで、「好かれるばかりがタレントじゃない―激論！タモリ、ギャル60人と対決―」と題された回（１９８２年5月29日放送）に出演した。

『ひょうきん族』が『全員集合』に勝った日

もちろん、テレビにおける「反－真面目」の急先鋒（きゅうせんぽう）は笑いであった。１９８０年、Ｂ＆Ｂ、ツービート、島田紳助・松本竜介、ザ・ぼんちら若手漫才師を中心に巻き起こり、社会現象となった漫才ブームはこの１９８２年になっても続いていた。

ゆったりしたテンポの古典的な漫才から脱し、スピーディ、かつ本音を吐露するネタで若者から圧倒的に支持された漫才ブームは、バラエティ番組のありかたさえも変えるようになる。

その流れを牽引（けんいん）したのが、１９８１年5月に始まったフジテレビ『オレたちひょうきん

族』である。ビートたけし、明石家さんま、島田紳助など、漫才ブームのなかで人気を得た芸人が大挙出演した。

当時、バラエティ番組を象徴する存在だったのが、土曜夜８時から放送のザ・ドリフターズ『８時だョ！全員集合』（ＴＢＳテレビ系、１９６９年放送開始）である。50・５％という驚異的な最高視聴率を記録するなど、「お化け番組」と呼ばれたほどの人気番組だった。『ひょうきん族』は、その真裏の時間で『全員集合』に戦いを挑んだ。笑いへのアプローチも対照的で、『全員集合』が入念な打ち合わせとリハーサルを繰り返す「つくり込まれた笑い」だったのに対し、『ひょうきん族』はその場のノリを重視し、面白くなるなら脱線も構わない「アドリブの笑い」だった。

ここまで見てきたように、バラエティ番組に限らず時代、そしてテレビはお約束や常識を破壊する方向に大きく舵（かじ）を切っていた。その結果、両番組による熾烈（しれつ）な「土８戦争」は次第に『ひょうきん族』優位に傾いていく。そして１９８２年10月９日放送分において、『ひょうきん族』が『全員集合』の視聴率を初めて上回る。それはまさに、歴史的な事件だった。

こうして１９８２年、ずっと視聴率が低迷していたフジテレビは全日（午前６時から深夜０時）、ゴールデン（午後７時から10時）、プライム（午後７時から11時）のすべての時間帯で在京民放首位となる、いわゆる「視聴率三冠王」を達成する。それは、笑いを通じてテレビが「遊ぶ社会」を先導する時代の始まりであった。

１９８２年のタモリ

さて、本書の主人公であるタモリは、１９８２年にどうしていたのだろうか？

１９７０年代後半、でたらめ外国語やイグアナの物真似（ものまね）など怪しげな芸を連発する「密室芸人」として注目されるようになったタモリは、テレビでの活躍の場を広げていた。

たとえば、タモリ一流のパロディ精神を発揮した番組が『夕刊タモリ！こちらデス』（テレビ朝日系）である。１９８１年10月に始まった番組で、放送時間は日曜夕方６時30分からの30分間。

実は、同じテレビ朝日で筑紫（ちくし）哲也がキャスターを務める『日曜夕刊！こちらデスク』（１９７８年放送開始）という正統派の報道番組があった。タイトルが示すように、『夕刊タ

モリ！こちらデス』はそのパロディ（「夕刊」を分解すると「タモリ」とも読める）で、しかも筑紫の番組は日曜夕方6時からの30分間。つまり、本家とそのパロディ番組が連続して放送されるという、ちょっと前例のない斬新な編成になっていた。

しかし、『夕刊タモリ！こちらデス』は1年で終了することになる。そこでテレビ朝日がタモリのために用意したのが、深夜バラエティ『タモリ倶楽部（くらぶ）』だった。[*3]

１９８２年10月に始まった『タモリ倶楽部』もまた、パロディ精神に富んだものだった。廃盤になったレコードを深掘りする「廃盤アワー」のようなマニアックなコーナーの一方で、ディスコで流行（はや）ったステップを学ぶ「SOUL TRAIN」のパロディ「SOUB TRAIN」（「総武線」のもじり）、メロドラマのパロディ「ドラマシリーズ　男と女のメロドラマ　愛のさざなみ」のようなパロディ企画が話題を呼んだ。

パロディは、タモリがメイン司会の『今夜は最高！』（日本テレビ系、１９８１年放送開始）でも重要な要素になっていた。

この番組は、土曜夜11時からの放送。毎回ゲストを招き、酒を酌み交わしながらのトーク、タモリがトランペット演奏もする音楽コーナー、そして出演者によるコントなどで構

成されるバラエティショーである。そのコントでは、古今東西の名作映画やドラマのパロディが定番だった。ある回などは、全編ミュージカル『マイ・フェア・レディ』のパロディをやったこともあった。[*4]

このように冠番組も増えたタモリだったが、パロディの多さからもわかるように一癖も二癖もある芸風は変わらず、万人向けの笑いとは言いがたかった。それゆえ好感度が高いとはお世辞にも言えず、「嫌いなタレント」の代表格でもあった。『ＹＯＵ』におけるタモリ出演回のタイトルが「好かれるばかりがタレントじゃない―激論！タモリ、ギャル60人と対決―」だったことを見ても、当時のタモリを取り巻く世間の雰囲気がうかがえるだろう。

だが、そんなタモリに熱い視線を送っているひとりの人物がいた。フジテレビ（当時）のプロデューサー、横澤彪（たけし）である。

横澤は、『オレたちひょうきん族』をプロデュースするなど漫才ブーム以降の新しいバラエティ番組づくりの先頭に立つ存在であり、「仕掛け人」とも称された。ただ、タモリ

はその流れとはそれまでほとんど縁がなかった。

ところが、１９８２年10月からお昼の帯番組をスタートさせることになった横澤彪は、そのＭＣとしてタモリに白羽の矢を立てる。そして始まったのが、『森田一義アワー　笑っていいとも！』であった。

ただし番組は、決してスムーズに誕生したわけではなかった。そのあたりから、話を進めていくことにしよう。